

# 第10回 Scale tone motion

## Scale tone motion

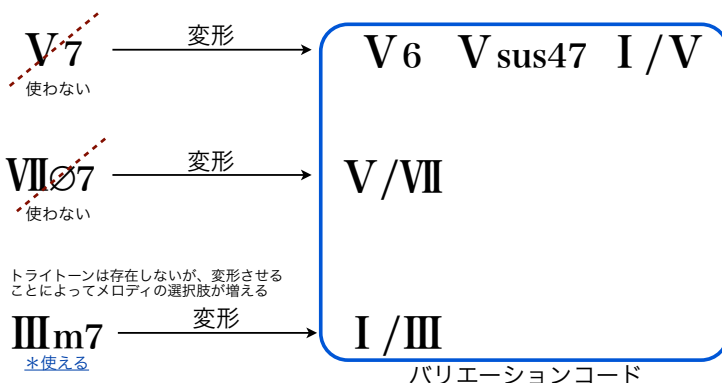
日本語で言えば「音階的な音の動き」すなわち、Diatonic 7th chord上でとなりに移動する進行のことです。

**※重要**

スケールトンモーション時にはトライトーンをなくすことが必要。

トライトーンを含むV7はIへ、VII $\emptyset$ 7はIII7へ進行するエネルギーが強く、その他のコードへ進むと違和感が発生します。そこでトライトーンを含むV7とVII $\emptyset$ 7は変形する必要があります。また、III m7も変形して用いられることがあり、変形されたコード群を**バリエーションコード**と呼びます。なお分数表記のコードは分母=ルート 分子=和音(コード)を示しています。

トライトーンを無くす



G7      G (トライアド)      G6      Gsus47      C/G (Gsus46)

m7      m7を上にはずらす      m7を下にはずらす      M3を上にはずらす      M3とm7を同時にずらす

トライトーン

バリエーションコード

B $\emptyset$ 7      G/B      G6/B

o5      o5を上にはずらす(m7は消す)

トライトーン

バリエーションコード

## Tips : 6コードとsus4コード

### 6コード

メジャートライアド、もしくはマイナートライアドにM6を足したコード。構成音でみるとG6=Em7となるが、ルート(Bass)の位置が異なることでコードそのものが違うという認識が大事です。

$$\begin{array}{l} \text{メジャートライアド} = R + M3 + P5 \\ \text{マイナートライアド} = R + m3 + P5 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{メジャートライアド} \\ \text{マイナートライアド} \end{array}} \right\} + \text{M6}$$

(m6ではダメ、違うコードの意味になります)

D7Cでは I6 II m6 IV6 V6がある

### sus4コード

本来M3のものが一時的にP4が使われているコードです。この時のP4をsus4と呼びます。sus4は日本語で「掛留音」とよばれ、前のコードのm7音そのまま引きずられて持ち越された音です。基本的には本来のM3を持つコード型に解決します。(単独のコードとして用いてもかっこいい)

The diagram illustrates the resolution of sus4 chords. It shows a sequence of chords: Dm7, Gsus4, G7, Csus4, and C. The m7 of Dm7 and the sus4 of Gsus4 are highlighted in red. Arrows show the m7 of Dm7 moving to the M3 of G7, and the sus4 of Gsus4 moving to the M3 of C. The word '解決' (Resolution) is written above the G7 and C chords. The bottom staff shows the bass line with notes corresponding to the chords.

D7CではIsus4とVsus47があります。なおIsus4△7はトライトーンが作られるので流派によっては認めていません。sus4を用いると独特の解決が遅れる感覚が発生します。Vにおいては積極的にsus4サウンドを用いたほうがかっこよくなります。

なお、VII $\emptyset$ 7からの絶対進行先であるIII7にもsus4を用いることができます→III sus47

# Scale tone motionを使ったコード進行

ex.1 (IV-III-II-I)

|F△7 | Em7 | Dm7 | C△7 |

ex.2 (IV-V-VI)

Em7→C/E G6→Gsus47, C/G の使用も可能。

|F△7 | G6 | Am7 | |

## ※スケールトーンモーション下行形

||: C | G/B | Am7 | G6 | F△7 | Em7 | Dm7 | Gsus47 G7 :||  
Diatonic dominant motion

沢山のヒット曲に使われる非常に重要な進行

この進行はカノン進行(バロック期の代表曲：パッヘルベルのカノン)のベースを変化させたものとも見れる。

カノン進行

||: C | G | Am | Em | F | C | F | G :||

下行形のマイナーヴァージョン

||: Am | G6 | F△7 | Em7 | Dm7 | C△7 | BØ7 | E7 :||  
Diatonic dominant motion

コード進行の構築においては循環コードを基礎として、Diatonic dominant motionとScale tone motionを用いて発展させればまず違和感のないコード進行になるはずですが、もしも、この手法で違和感が発生するとしたら「メロディのストーリーとコードが違う」「コードの時間軸上の配置が狂っている」ことが原因に考えられます。

# etude DDM & STM

## Intro

Chord symbols: C $\Delta$ 7, F $\Delta$ 7, Em7, Am7, G6, F $\Delta$ 7, Em7, Dm7, G7<sup>sus4</sup>

## A

Chord symbols: G7, C $\Delta$ 7, Am7, F $\Delta$ 7, G7<sup>sus4</sup>, G7, Em7, Am7, Dm7

## B

Chord symbols: E7<sup>sus4</sup>, E7, Am, G, F $\Delta$ 7, F $\Delta$ 7, G7<sup>sus4</sup>, G7, C $\Delta$ 7, Dm7, G7

## Sabi

Chord symbols: Em7, Am7, B $\emptyset$ 7, E7<sup>sus4</sup>, E7, F $\Delta$ 7, Em7, Dm7, C $\Delta$ 7

## Outro

Chord symbols: F $\Delta$ 7, Em7, Am7, Dm7, G7, C $\Delta$ 7